

新華僑・新華人に関する展示のねらいと残された課題

著者	? 岩
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	64
ページ	189-197
発行年	2006-12-28
URL	http://doi.org/10.15021/00001547

新華僑・新華人に関する展示のねらいと残された課題

佟 岩

1 はじめに

今回の新華僑・新華人に関する展示の主なねらいは、新華僑・新華人が内包する文化的多様性を、諸個人の日常生活のあり方を通して明らかにすることにあった。

日本社会で「多民族社会」やエスニシティという言葉が用いられる場合、それは事実上、「多国籍社会」やネイション（たとえば「中国人」）を意味することが少なくない。また「多文化共生」という概念も、しばしば日本文化との異質性や特異な伝統文化の尊重という文脈で語られることが少なくない。

もちろん、こうした「多民族社会化」や「多文化共生」は、従来の日本の「単一民族神話」を相対化する上で、重要な意義をもっている。

しかし本来、「民族」と「国民」、エスニシティとネイションは異なる概念である。同じネイションの中でも各地域の独自性も大きい。また各民族文化の異質性や伝統の重視は、しばしば各民族文化が内包する多様性や柔軟性、および、現実の生活の中での創造性や同じ人間としての普遍性の看過と表裏一体でもある。

このことは、新華僑・新華人というエスニック・グループの紹介において、特に留意しなければならない。なぜなら中国は典型的な多民族社会であり、漢民族内部でも地域的な文化差が極めて多様である。また新華僑・華人は日本での在留資格も多様で、それは職業階層の多様性とも直結している。その意味で新華僑・新華人の生活世界は、極めて多くの異質性を含む多元的空間である。しかし一方、日本と中国の間には長い歴史的な文化交流があり、来館者の多数を占めるとされる日本人には「中国文化」に対する一定のイメージが、他のエスニック・グループに対するそれに比べ、一層明確に存在していると思われる。

したがって今回の展示では、新華僑・新華人の現実生活や文化がもつ創造性や多様性を紹介することにより、既存のステレオタイプな「中国的なもの」を相対化・脱構築することが、重要な課題となった。そうした観点から今回、新華僑・新華人の方々から280点以上の現物資料、および、個人的な資料や写真をお借りして、彼・彼女らの生活と文化を、できるだけリアルに再現することを目標とした。

2 新華僑・華人の定義と今回の展示対象

さて、今回の展示で対象とした新華僑・新華人とは、いわゆる「ニュー・カマーの在日中国人」である。日中文化交流協定の締結（1979年12月）を機に徐々に増加し、特に中曽根内閣の「留学生10万人受け入れ」政策（1983年8月）以降、一挙に急増した。2004年現在、外国人登録者数のうち中国人は48万7,570人で、その88%以上にあたる約43万人が新華僑にあたる（法務省入管局 2005）。超過滞在者や日本国籍取得者を含めれば、今や在日の新華僑・新華人は45万人を超えると考えられる。

なお、華僑と華人の区別については、海外に居住する中国国籍者を華僑、移住先の国籍を取得した中国系の人びとを華人と呼ぶことが一般的である¹⁾。ただしそれ以外にも多様な説があり、必ずしも厳密に区別されずに用いられることも多い。実際の生活実態でも共通点・類似性は多い。そこで今回の展示では、新華僑と新華人を明確に区別せず、一括して展示した。

今回の展示で直接、対象とした新華僑・新華人は、在留資格・日本滞在年数の違いによって、大きく2つのタイプに分けることができる。

まず第1は、留学生・就学生・研修生・技能実習生等、その在留資格で1年～数年間に限って日本に滞在する人びとである。新華僑が新たに来日する場合、その在留資格は就学・留学・研修であることが多い。2004年現在の登録者は、就学生が3万8,873人、留学生が8万7,091人、研修生が4万8,729人に達する。研修から技能実習への移行申請者も約2万1,000人に及ぶ（法務省入管局 2005）²⁾。

第2は、専門職・管理職の社会人である。多くの留学生が学業を終えた後、日本に残って就職している。彼・彼女らの多くは高学歴で、日本企業に勤め、または自ら起業している（陳天璽 2003：236）。「教授」ビザで滞在する中国人も2,400人を超える（陳於華 2004：86）。

一方、今回の展示で直接、取り上げることができなかった新華僑・新華人として、下記の人びとがいる。

一つは、日本人の配偶者として日本に暮らす新華僑・新華人である。留学・就学・研修等で来日し、その後、日本人と結婚して日本に定住する人びとも少なくない。そうした人びとの二世もかなりの数にのぼる。来館者からも、「私のように日本の血もあり中国の血も入っている人達のこといろいろとりあげてほしいです」といった感想が寄せられた。

また近年、日本人男性との結婚を契機として、配偶者として来日する中国人女性も増えている。嫁不足に悩む日本の農村等で、中国人女性との見合いによる結婚が増加し、それを斡旋する専門業者も多数存在している。

もう一つは、超過滞在・密入国者を含め、違法行為や犯罪に関わる新華僑・新華人の

実態についても、今回の展示では十分に触れることができなかった。

もちろんこうした多民族社会化のいわば「暗部」については、今回の1階の全体展示で若干紹介されている。またこうした問題の存在を安易に強調することは、多民族共生の理念にふさわしくないという考え方もある。しかし一方、現在、新華僑・新華人の犯罪がマスコミ等で頻繁に報道される中、排他主義や差別につながる形で、こうした問題といかに向かい合っていくかは、今後の多民族社会の大きな課題といえよう。来館者の感想の中にも、「犯罪がどれだけ増えているかも展示すべき」、「留学生の犯罪などがあるのも事実。どうやって解決していけるかは、難しくてもよくわかりません」、「どこかの県警の『中国人には気をつけましょう』のピラ（を展示してほしい）」といったものが垣間見られた。

3 展示で重視した3つの多様性

さて、今回の展示で最も重視したことは、前述のごとく、新華僑・新華人が内包する多様性である。

その多様性は3つの機軸—(1) 民族・エスニシティ、(2) 地域、(3) 職業階層から捉えることができる。

しかもこの3つの機軸は、相互に密接に絡み合っている（浅野 2003：59-67；2004：20-29）。

すなわち、1990年代前半までに来日した新華僑・新華人は、中国の沿海部大都市の出身の漢民族が多かった。彼・彼女らは来日前、専門職・管理職、また大学卒であり、日本では大学院に進学する比率が高かった。そしてその多くは学業を終えた後、日本に残り、メディア、ビジネス、法曹、文化、教育等の各分野で、専門職・管理職として活躍している。

これに対し、1990年代後半以降に来日した新華僑・新華人の中には、中国の周辺・内陸地域出身の、少数民族が増加しつつある。この時期、中国の改革開放・グローバル化に伴い、地域間格差が拡大して周辺地域が衰退し、人口流出が余儀なくされた。そこで、新たに来日した就学生・留学生には、東北地方をはじめとする周辺地域、そして朝鮮族・モンゴル族などの少数民族が増えてきたのである。彼・彼女らには高卒の労働者・農民が多く、したがって日本では専門学校や大学への進学を希望している。研修生にも中卒・高卒者の労働者が圧倒的に多くなっている。

いわば1990年代を通して、新たに来日する新華僑の出身地・民族、そして職業階層が、密接な関連をもちつつ、いずれも大きく変化し、かつ多様化してきたのである。

今回の展示では、こうした各民族・各地域出身の多様な新華僑・新華人の生活実態を明らかにしようとした。またそうした多様性を明確にする観点から、各展示物に説明文

を加えた。

以下、具体的な展示内容に即して、みていくことにする。

3.1 民族と地域

まず今回の展示では、漢民族以外にモンゴル族と朝鮮族の生活文化を紹介した。

特に内モンゴル遊牧民出身のモンゴル族・Tさん夫婦からは、ジンギスカンの肖像を飾った部屋の写真、故郷から持参した各種のチーズ、「炒めた粟」、ミルクティー、真空パックの羊肉、および、民族衣装等の実物の提供を受け、展示した。Tさん夫婦は毎朝、ジンギスカンの肖像に向かって礼拝している。またTさんの夫はインターネットのホームページや各種イベントで、内モンゴルの風習、歌、踊りを紹介している。今回の展示でも、そうしたイベントのチラシを紹介した。また展示期間中、2回にわたって馬頭琴の演奏や歌、箏を使った舞踊等を舞台上で披露していただいた。

吉林省の朝鮮族自治州から来日した朝鮮族・Kさんからは、毎日必ず食べている手作りキムチ、および、大学祭等でそれを着て歌や踊りを披露しているチョゴリを提供された³⁾。ただしこれらの現物資料は、今回の特別展の在日コリアンのそれとも重なる部分が多いと判断し、展示しなかった。ただし、中国朝鮮族としての生活実態を示す写真は展示した。

漢民族の内部でも、出身地によって生活文化は多様である。今回、展示にご協力いただいた漢民族の出身地は、北方の東北、北京、湖南から、南方の上海、広東、福建まで、多岐にわたる。

福建出身の就学生・Lさんからは、故郷の家庭料理である「焼きビーフン」や「海苔卵スープ」の食材、調味料（花椒、生姜粉等）をお借りし、展示した。いずれも彼女が来日する前、故郷から大量に持参したものだ。また福建料理を調理する彼女の写真も展示した。

上海出身の研修生・技能実習生⁴⁾については、彼女らがふだん食べている上海料理の写真、および、中国から持参した真空パックの食材（肉・魚等）がぎっしり詰まった冷蔵庫の写真やビデオ映像を展示した。上海料理は甘酸っぱく、テーブルの上に十数種類の料理（缶詰、漬物、サラダ、スープ等）の小皿が所狭しと並べられる。

広東出身の研究者・Yさんからは、広東料理を食べる家族の写真を提供され、展示した。広東料理は、一般に日本で「中華料理」としてイメージされているものだ。比較的あっさりして、新鮮な海産物を使う。

北京出身の研究者・Hさんからは、北京風ギョウザを食べている家族の写真を提供され、展示した。北京料理は油っこく、味が濃い。テーブルの上にはギョウザだけが大量に出されており、上海料理の様式と対照的だ。

以上のように、多様な民族・地域の生活文化を紹介したが、特に料理・食材の展示が

多くなった。これは、料理・食事に、民族・地域文化の個性が最も顕著に現れていたためである。そしておそらく中国人がこの展示をみれば、民族的・地域的多様性を極めて明瞭に感じ取れたと思われる。しかし、日本人の来館者に、果たしてその多様性が十分に認識されたかどうか、若干の危惧も残る。「非日本的」な特徴が目立ち、それが「中国的」と一括されてしまう可能性もありうると思われる。今後への課題としては、パンフレットなど、文字媒体により丁寧な説明を加えるとともに、料理・食材の試食や料理教室等のイベントを通し、五感を駆使して多様な地域・民族文化を実感してもらうことが望ましいのではないかと考えられる。

3.2 職業階層と中国文化

さて次に、文化の問題を考える際、しばしば軽視されがちになるのが階級・階層的な観点である。しかし文化を変化させたり、維持・再生産したりする目的・論理は、階級・階層毎に明らかに異なる。新華僑・新華人が保持する「中国的な文化」の内実、および、それを保持する理由・目的も、階層毎に異なっている。

まず客観的にみれば、最も多くの中国製品に囲まれて暮らしているのは、留学生・就学生・研修生等である。今回、彼・彼女らが中国から持参し、日常生活で使用しているシャンプー、歯磨き粉、コップ、洗剤、薬品、調味料、漬物、菓子、ヒマワリやスイカの種、乾物や真空パックの食材、圧力鍋、ティッシュ、爪切り等の実物、および、布団カバー等の中国製品に取り囲まれて生活している部屋の写真を展示した。

こうした留学生・就学生・研修生等にとって、中国製の日用品を持参・使用することは、まず何よりも経済的な節約の行為である。彼・彼女らの多くは経済的に貧困な生活を余儀なくされている。特に来日資金を借金で調達した人びとは、その返済分も貯金しなければならぬ。そこで彼・彼女らは、ありとあらゆる方法で節約を試みる。彼・彼女らの生活の中にある「中国的な要素」はほとんど値段の安い日用品であり、決して「中国文化へのこだわり」ではない。

これに対し、専門職・管理職の社会人の新華僑・新華人の場合、日常生活の中では客観的にはそれほど中国製品は多くない。食材も日用品もほとんど日本で買っている。

専門職・管理職の中には、中国文化にほとんど無関心な人もいる。今回、日本酒と刺し身が好きな企業家・Qさん一家の食事風景、友人と花見を楽しむ姿、事務所で仕事をする様子等の写真を展示した。そこに「中国的な文化」を見出すことは難しいだろう。

とはいえ、専門職・管理職の新華僑・新華人にとって、多くの場合、中国語を含む中国文化は職業的に重要な文化資本である。そこで彼・彼女らの中には、中国人としてのナショナル・アイデンティティを根強く保持し、装飾品や骨董品などの中国の伝統文化にこだわり、子供にも中国語を継承しようと努力している人が少なくない。今回の展示では、彼・彼女らの家庭にあった中国風の提灯や赤い装飾品、子供のための中国の絵本、

学習教材、中国語の歌のCD、中国語学習機、中国の祖父母にあてた子供の手紙等の実物、および、中国の掛け軸や大きな陶器壺、唐三彩、中国のカレンダー等が飾られた部屋の写真を示した。また、ビジネスマンのSさんの自宅リビングを再現した。そこには、中国の絵画や置物・彫刻、おつまみやお茶、さらに中国語学習用のカレンダーや妻の手作りの日中両国語の絵本（日本の絵本に中国語訳を張り付けたもの）等がおかれていた。子供に中国語絵本を読んでやり、中国語カレンダーで勉強させている場面の写真も併せて展示した。さらに、子供に中国文化を伝えるためにどのような努力をしているかについてインタビューを行い、そのビデオ録画を上映した。

なお、こうした専門職・管理職の新華僑・新華人の家庭生活にある中国製品・「中国的な文物」は、決して経済的な節約のためのものではない。むしろ中国人としての民族文化やアイデンティティを重視し、世代的に再生産するため文化装置である。彼・彼女らもまた、中国から食材等を買ってくることもある。しかしそれは「安上がり」だからではなく、日本でなかなか手に入らない特別の食材をわざわざ買ってくるのである。そしてこうした専門職・管理職の日常生活にみられる「中国文化」の多くは、地域的・民族的に多元的なそれではなく、むしろある意味で一枚岩のかつ高級な「中国文化」といえる。

さらに、専門職・管理職の新華僑・新華人は、活発なエスニック・ビジネスを展開し、多くの組織・団体を立ち上げ、独自のコミュニティを作っている⁵⁾。中国語テレビの放映、書籍、新聞、雑誌の刊行等も活発である。今回の展示では、こうした諸団体・エスニックビジネスの広報刊行物、著作、新聞・雑誌の実物、および、活動を紹介する写真や新聞記事も示した。大富電視台のテレビ番組紹介、『中文導報』、『留学生新聞』、『日本僑報』等の新聞、雑誌、そして『在日中国人大全』をはじめとする著作物は、その一端である。

以上のように、留学生・就学生・研修生等と、専門職・管理職の社会人とは、同じ新華僑・新華人といっても、その生活や文化の様式は大きく異なる。両者の間では、職業階層を超えた「新華僑・新華人」としての共通感覚、アイデンティティは、極めて希薄といわざるを得ない。

4 新華僑・新華人の生活と悩み —— むすびにかえて

さて、今回の展示のもうひとつのポイントは、日常生活の中の「中国的」な現物資料にとどまらず、新華僑・新華人の日本での現実の労働—生活実態を示すことにあった。

そしてこの点でもまた、職業階層毎に、その内実は大きく異なってくる。

留学生・就学生に関しては、日本語の教科書、資格外活動許可証、一週間のスケジュール表等の実物、および、授業風景や牛丼屋でのアルバイトの風景等の写真を展示

した。昼間は授業、夜はアルバイトに忙しくかけまわり、勉強と仕事の両立に悩みながら頑張っている留学生・就学生の姿が、ある程度、浮き彫りにできたと思われる。またびっしりとラインが引かれ、書き込みがある教科書からは、真剣な勉強ぶりがうかがえる。また彼・彼女らが住むアパートの部屋の写真も展示した。6畳一間のアパートに3人で共同生活をする就学生、シャワーもない狭い部屋に住む留学生の写真は、彼・彼女らの経済的な苦しさ、「節約ぶり」を示していた。来館者からは、「周りにいる留学生などが生活面でかなり苦労していることがよくわかりました」、「留学している人など、とても苦労していると感じた」、「岡山の花火火事の当事者は、どうして留学生が花火のバイトなんかしていたんだろう?」と思っていたけど、外国の人は仕事が見つかりにくいということに改めて衝撃を受けた」といった感想が寄せられた。

研修生・技能実習生については、縫製業の研修先で作った服、研修用の教材、研修用生活指導パンフレット、日本語の教科書の実物、ビザのコピー、会社での研修現場や宿舍の部屋の写真等を展示した。また、2DKに6人で集団生活をする研修生・技能実習生の宿舍での生活をビデオで撮影し、上映した。

専門職・管理職に関しては、博士学位論文や、貿易業務で取り扱っている製品（台湾製の電気部品）、経営する会社のパンフレット等の実物、および、購入した一戸建や自社ビル、大学の研究室での写真を展示した。

こうした現実の労働・生活実態を示す現物資料は、決して「中国的なもの」ではない。またそれは職業階層毎に明らかに異なり、新華僑・新華人としての共通性をもつものでもない。しかし実際の新華僑・新華人の諸個人にとってみれば、実はこうした領域こそが最もリアルな現実生活であり、また重大な関心事であることが多い。ここには、国籍や民族が違っても同じ人間・生活者として日本社会に生きる新華僑・新華人の現実の姿がある。このような今回の展示のねらいの半分は、来館者にも伝わったように思われる。来館者の感想の中には、「同じ人間として接していくべきだと思った」、「人として生きているところ（がわかってよかった）」、「私たち、日本人と何も変わらないという印象をもった」といった声も少なくなかった。また、「特に2階の在日中国系の展示で、さまざまなカテゴリーの“在日中国人”の生活をコミカルに写真で表現していたのがおもしろかった」という感想も、新華僑・新華人が多様で、しかもそれぞれ個人として人生の目標をもって生きていることを感じ取ってくれたものといえよう。

しかしその一方で、新華僑・新華人が現実生活の中で直面している深刻な諸問題、とりわけ日本人による差別や文化の壁以外の諸問題について、どれほど深く掘り下げて提起できたかという点で、一定の反省が必要であろう。もとより留学生や就学生の経済的困難については、前述のように来館者から感想を寄せられた。しかし私達が展示資料を収集する際に聞き取り調査をした生活上の苦労・困難、および、その社会的な背景について、今回の展示の中だけでは必ずしも十分に伝えきれなかった。就学生・留学生・研

修生等についてはいうまでもないが、専門職・管理職の新華僑・新華人も、実は激烈な競争の中で業績をあげ、地位を確保するために、家族との触れ合いや健康不安など、様々な犠牲を払っているのである。

一人一人の新華僑・新華人は、現実生活の中で様々な困難に直面し、それと苦闘している。そうした彼・彼女らが抱える問題は、中国固有の民族文化、あるいは日中の文化摩擦の問題というより、むしろ現実的な生活・経済・雇用問題であることが多い。日本の多民族社会化に際して求められるのは、文化的異質性の理解力と同時に、同じ人間・生活者としての想像力であろう⁶⁾。日本社会の多民族化・異文化共生の課題と、こうした現実生活の矛盾克服の課題を統一するような展示の方法を開発することは、今後の大きな課題といえよう。

注

- 1) 「華僑」という言葉は、1870-80年代に造語された。清国が条約に基づく外交関係に入り、在外居留の商民を定義する必要に迫られ、「僑居華民」という四字句を用い、これを二字熟語に倒置して「華僑」としたのである。一方、「華人」はさらに新しく、1970年代から中国が受入先の国籍・市民権の取得を呼びかけ、現地同化が進むことによって用いられ始めた（斯波 2002：105-106）。
新華僑・新華人という概念は、これまで3つの意味で用いられてきた。第1は、新たに華僑となった者を旧来の華僑から一般的に区別するための概念である。第2は、日本に固有の概念だが、第2次大戦以前に中国大陸から来日した華僑に対し、戦後まもなく台湾から来日した中国人を「新華僑」と呼んだことがある。そして第3は、中国大陸での改革・開放（1979年）以降、海外に出た中国人を指す概念である（游 2002：364-365）。今回の展示の対象は、このうち第3の意味での日本における新華僑・新華人といえる。
- 2) 技能実習生の移行申請者については、2005年財団法人国際研修協力機構資料を参照した。
- 3) 中国朝鮮族の留学生については金（2004）参照のこと。
- 4) 縫製業研修生・技能実習生の実態については、佟・浅野（2005）参照のこと。
- 5) 1999年9月、新華僑の呼びかけにより、老華僑・中国系資本も共同して、日本中華総商會が結成された。西日本新華僑華人聯合會、在日弁護士聯合會など8つの新華僑華人団体の支援の下、2003年9月に日本新華僑華人會も設立された。1980年代後半以降、中国語のマスメディアも急増し、日本で創刊された中国語の新聞・雑誌はこれまでに140種類以上、現在、刊行中の新聞・雑誌に限っても30種類以上ある（中野 2004）。中国語のテレビも5チャンネルあり、500人余の新華僑・華人の著者により1000冊以上の日本語の著書が刊行されている（陳於華 2004：86）。
- 6) 人間に普遍的な生活過程を捉える生活過程論については、浅野（1997：第1部第2章）、および浅野（2005：第3部第2章）参照のこと。

文 献

浅野慎一

- 1997 『日本で学ぶアジア系外国人』 岡山：大学教育出版。
- 2003 「多民族社会・日本における階級・階層構造と文化変容」『現代社会学フォーラム 2』 京都：世界思想社，59-67頁。
- 2004 「中国人留学生・就学生の実態と受け入れ政策の転換」『労働法律旬報』 1576：20-29。
- 2005 『人間的自然と社会環境』 岡山：大学教育出版。

金 明姬

- 2004 「日本における中国朝鮮族の生活と意識」『人間科学研究』（神戸大学発達科学部人間科学研究センター）11(2)：65-92。

斯波義信

- 2002 「華僑・華人」游仲勳・斯波義信・可見弘明編『華僑・華人事典』 東京：弘文堂，105-106頁。

陳 於華

- 2004 「増大する新来中国人のコミュニティ」庄司博史編『多みんぞくニホンー在日外国人のくらし』 大阪：千里文化財団，86-88頁。

陳 天璽

- 2003 「中国人日本社会と新華僑」駒井洋編『多文化社会への道』 東京：明石書店，231-260頁。

修 岩・浅野慎一

- 2005 「縫製業における中国人技能実習生・研修生の労働・生活と社会意識」『日本労働社会学会年報』 15巻，東京：東信堂，139-165頁。

中野克彦

- 2004 「エスニック・ネットワークとエスニック・メディア」庄司博史編『多みんぞくニホンー在日外国人のくらし』 大阪：千里文化財団，52-59頁。

法務省入国管理局

- 2005 『広報資料 平成16年末現在における外国人登録者統計について』 法務省入国管理局。

游 仲勳

- 2002 「新華僑」游仲勳・斯波義信・可見弘明編『華僑・華人事典』 東京：弘文堂，364-365頁。

